

靖国神社春季例大祭



会 報
特 攻
平成6年8月

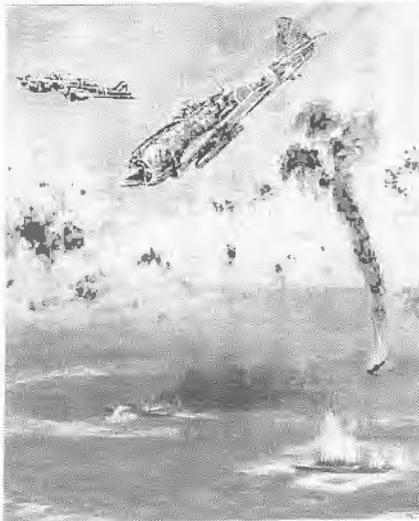
第20号

〒105 東京都港区虎ノ門
3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊
戦没者慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090

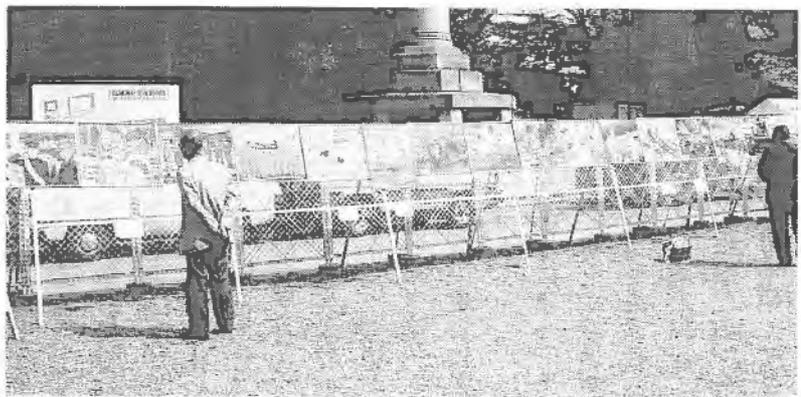
編集人 田 中 賢 一
発行人 木 村 元 正

勅使参向

4月22日の当日祭には勅使が参拝された。また高松宮妃殿下、三笠宮同妃両殿下も参拝なされた。



その中の一点松本武仁画



三日間の大祭期間中我が会の画伯達による特攻に因む油絵の展示があった。

学徒出陣五十周年特別展



本年1月1日から7月16日まで遊就館内で、蘇る殉国学徒の至情と題し、戦没学徒の遺影、遺品等の展示があった。

目次

靖国神社春季大祭 既刊の「特別攻撃隊」	1
第三部顕彰譜補遺	2
鹿屋、加世田、沖縄文仁、 硫黄島 その他	
個人碑九点	
B 29に体当たりした人々 特攻隊員は命令か志願か	11
誠第114飛行隊の編成、突入	20
誠第32飛行隊の到着、突入	23
〔慰霊祭〕 万世 14 知覧 19	
都城 19 沖縄義烈 23	

「特別攻撃隊」

第三部 顕彰譜 補遺

真だけ掲載する。
沖繩本島南端摩
文仁の台上には
「飛行第十九戦隊
特攻之碑」があ
る。

「特別攻撃隊」なる書物は平成二年に発行し、その中の第三部として特攻隊に関する総合的な慰霊顕彰施設及び特攻隊に係る碑等を紹介した。その後改修または新設せられたものや当時調査が行届かずに掲載漏れになったものなどがある。ここに補遺として紹介する。

改修されたものとしては、鹿屋について碑はそのままであるが海上自衛隊基地内にあった資料館は、平成五年基地外に新築された資料館に移った。次に万世の基地については従来碑だけであったが、隣接して加世田市平和祈念館が平成五年に新築され、遺品、遺書等多数が展示されている。

これについてあの書物では「空華之塔」の頁に一行付記しただけであったが、ここに改めて写真と解説を載せ、序に特攻だけのものではないが、同地にある航空関係碑全部を紹介する。

次に硫黄島にある特攻碑は調査漏れだったが、これも会報で既に詳細紹介したので、ここでは写真だけとする。また世田谷観音境内にある神州不滅特攻碑も同様である。

あの書物を作るときには部隊碑を対象に調査したので、個人碑については手が及ばなかった。その後個人または単機についても国内方々に碑のあることが判り、その中から特攻出撃したものをここに紹介するが、まだ漏れがあると思うのでお気付の方は情報を寄せられ度い。

金石に刻すことの 意義と我々の責務

苛烈な戦を生き残った者の責務は、国に殉じた人々の精神を後世に語り伝えることであるのは論を俟たない。慰霊祭をやるが、それが我々の贖罪にも似た自己満足であっては意味がない。生死を誓っておきながら自分が五十年も生き永らえて申し訳ないと思ったら、靖国神社で黙って手を合せて拝めばよい。盛大な慰霊祭をやる以上殉国の精神を宣揚することが第一義でなければならぬ。抑々慰霊慰霊というが、英霊は今更慰めてもらはんでもよいと申されるであろう。我々の会も任意団体の頃は「特攻隊慰霊顕彰会」だったのに、法人になると厚生省の小役人の言い分を聞いたとかで、顕彰がとれて平和祈念とか場違いの言葉がくっ付いてしまった。特攻隊の英霊は如何に思召されるであろうか。

慰霊祭をやるからにはつとめて若い人を誘い込んで、奏上する追悼文も聞かせ、その場の空気を吸はせるようにしなければならぬ。直会にかこつけ老人共が懐旧の思いにひたる、それが主眼ならば英霊の怒りを招くであろう。

後世に語り伝える手段

靖国神社や護国神社の祭典を盛大に行い、あるいは縁のある場所で慰霊祭を行って、それをマスコミに報道させることは後世に伝える効率的な方法であるが、日本のマスコミはなかなかそれを記事にしない。そこで書物にして江湖に問うことになる。就中特攻隊については、戦没烈士と共に在った我々世代の者に、文書にして残しておく責任がある。我が会が特攻総覧ともいべき書物を作ったのは、最もよい例である。しかし、このような書物がベストセラーになる筈はなく、読者の数は少なく、しかも購読者が死んだ後、書物はいつしか棄てられてしまいうらう。

そこで未来永劫に語り伝えてくれるものは碑である。鹿屋、知覧、万世のように記念館を作り得ればそれに越したことはないが、これ以上ちよっと望めない。そこで縁の深い個所、しかも人目に触れ易い所に碑を建てることの実現性もあり有効な方法である。

それは我々が書物で紹介した通り随分沢山できている。しかし多過ぎるということはない。碑には碑文をもつて、平易に、後の人にも判り易く事蹟を刻んでおかねばならぬ。

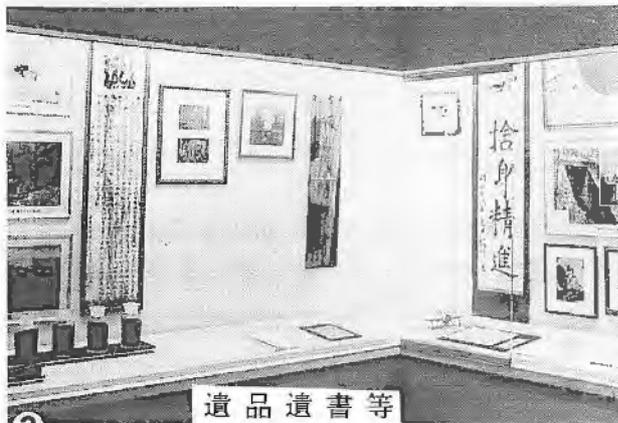
特攻隊に関しどこにどんな碑が現存しているか、それを知るのも我々の責任である。

(文責 田中賢一)

鹿屋航空基地資料館

平成5年7月落成
防衛庁所管

(特攻隊関係は一部のコーナー)



遺品 遺書等

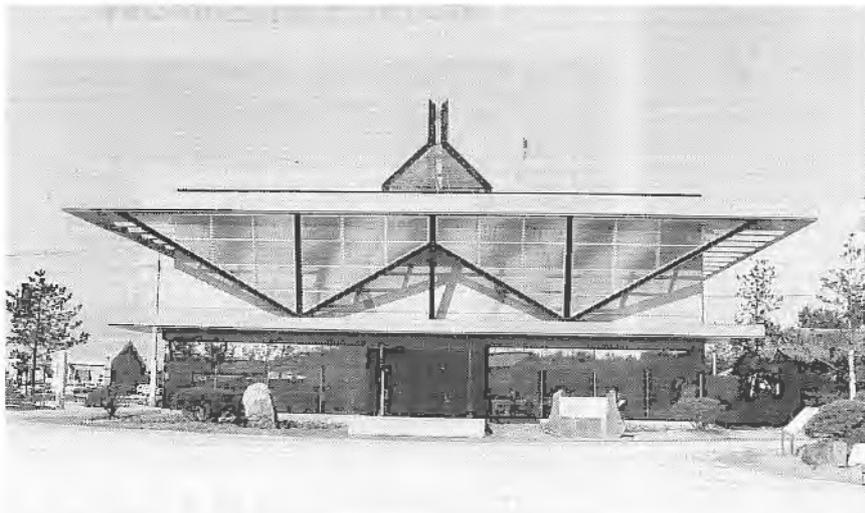


復元した零戦

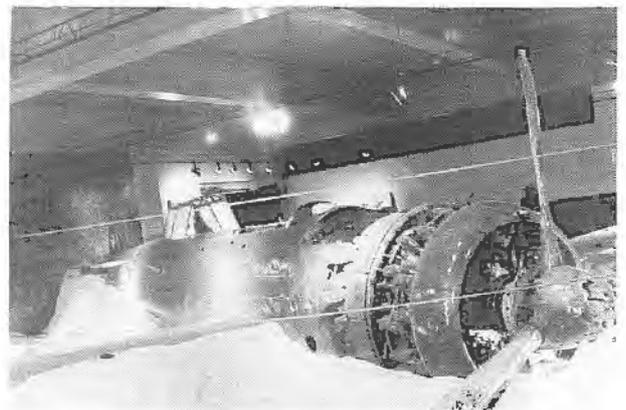
加世田市平和祈念館

平成5年5月落成
加世田市所管

(万世特攻基地の資料館)



遺影と遺品



すぐ裏海中から引揚げた零式水上偵察機

沖縄摩文仁にある航空関係碑

飛行隊19戦隊 特攻之碑



飛行第19戦隊は沖縄戦当時台湾にある第8飛行師団に属し、20年4月11日より5月29日の間、3式戦をもって沖縄近海の敵艦船に対し特攻攻撃を行い、16名が散華した。その間における戦死者も併せ29名の氏名が背面に刻まれている

所在地 空華之塔の左側

建立 昭和55年8月15日

建立者 飛燕会

空華の塔



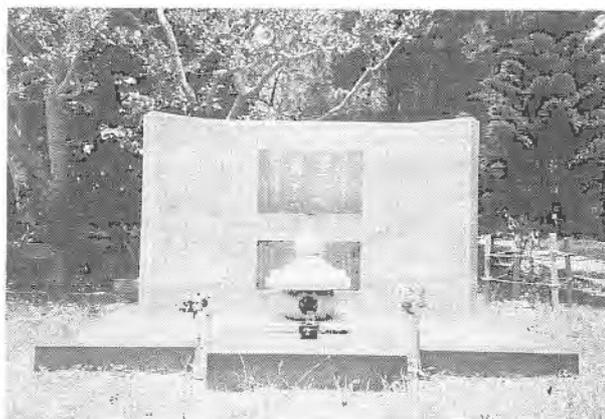
沖縄戦陸海軍航空部隊戦没者を祀る

所在地 摩文仁の慰霊公園の最高所南向きに建っている

建立 昭和39年11月1日

建立者 沖縄翼友会

南方航空輸送部の碑



以上三基の碑は南方洋上を望む摩文仁台上に、空華之塔を中央にしてこのように南面して建っている

摩文仁丘の上にある多数の碑



〈碑文〉

南方航空輸送部は今次大戦の広汎な南方戦線の諸地域の航空輸送等の機関として昭和十七年七月勅令により編成された部隊である。定期航空航空戦略等に従事した隊員の殆んどは民間航空関係者が徴用され苛烈な戦の中死を賭して懸命に戦い多数の犠牲者を出したのであります。戦場に散った在天の英霊よ遙か南冥の地を望む摩文仁の丘より我等声高らかに南方航空の歌を合唱し永久に安らげく眠り給えと祈るや切なるものがあります

合掌

昭和六十三年四月八日

南方航空戦没者慰霊碑建立賛同者

義烈空挺隊戦没者を祀る。副碑には義烈空挺隊奥山隊八名と第三独立飛行隊二五名の氏名が銅板に刻まれている



所在地 摩文仁公園の最高所で道路に面している（空華の塔と背中合せ）

建立 昭和51年5月24日

建立者 全日本空挺同志会

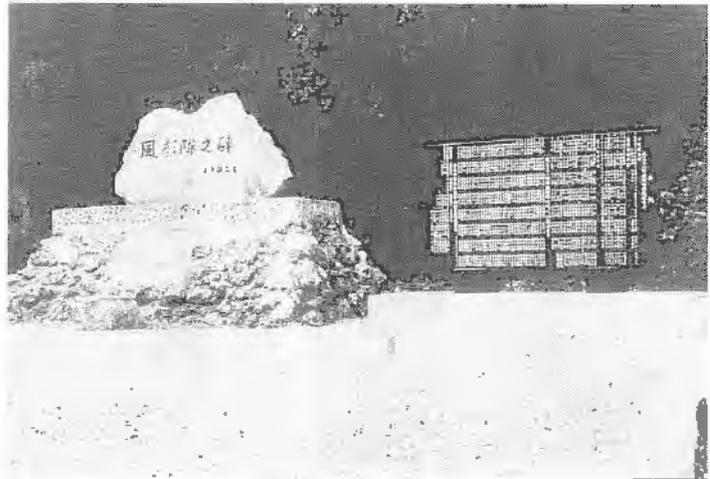
中央航空路部（風18918部隊）に属する沖縄管区本部、第5保安中隊、第9勤務中隊、路部本部、他管区及び第5野戦航空修理廠第1分廠の戦死者を祀る。これらの人名は副碑に刻まれている

所在地 摩文仁の丘の下、魂魄之塔の傍

建立 昭和53年5月20日

建立者 航風会

風部隊之碑



黎明之塔（軍司令部洞窟の上にある）



第三十二軍は沖縄県民の献身的協力を受け力斗奮戦三月月に及んだがその甲斐も空しく将兵悉く祖国に殉じ軍司令官牛嶋満大将並びに参謀長長勇中将等此の地において自刃す時に昭和二十年六月二十三日午前四時三十分茲に南方同胞援護會の助成を得て碑を建て永くその偉烈を傳ふ
昭和三十七年十月
財団法人
沖縄遺族連合會
石前 啓

B 29 に体当り撃墜した

吉沢平吉中尉の碑

武蔵野市吉祥寺東2-1-9
大法禪寺



吉沢中尉（戦死後少佐）は飛行第47戦隊に属し、成増飛行場に在って帝都防空に任じていた。機種は四式戦である。それまでにB 29二機撃墜、四機撃破の戦果を収めていたが、昭和20年2月10日、B 29約九〇機太田附近空襲に際し、下館上空に要撃しその一機を撃破した。この際自分の機も被弾損傷したが屈することなく、後続編隊の左外側機に敢然として体当りこれを撃墜し自らも散華した。

この碑は吉沢少佐の姉が建てたもので、遺詠、略歴、防衛総司令官の感状等が彫り込まれている。

遺詠及び感状は平成5年3月の会報16号に掲載してある。

忠烈 神鷲

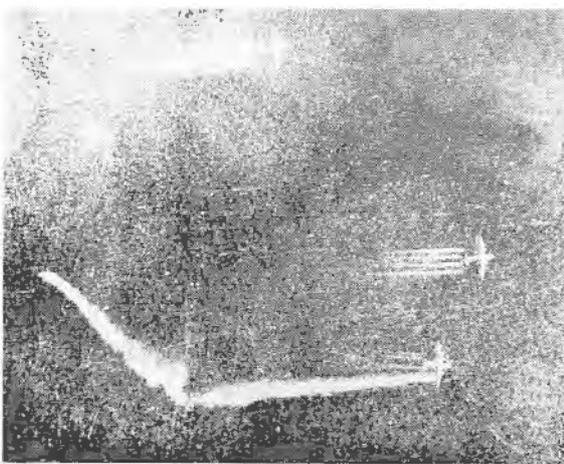
山本敏彰君之碑

所在地 埼玉県上尾市原市一〇八二
三角 隆方



第一練成飛行隊の山本敏彰中尉は昭和20年4月7日四式戦に搭乗し相模飛行場を発ち、上尾上空でB 29に体当りしてこれを撃墜、その際機体から投出されたのであらう、補助傘が出たままの状態で原市部落の畑に墜落戦死した。

戦後地元三角隆三ほか有志の方々がその場所に碑を建てたが、その後宅地に開発されたので、現在はその子の三角隆方に移設されている。





機体落下地点 三重県一志郡白山町二本木

飛行第56戦隊中川中尉は昭和20年6月26日、三式戦に搭乗しB29を要撃し、体当たり撃墜して自らも散華した。両碑とも昭和52年3月地元民によって建てられたものである。



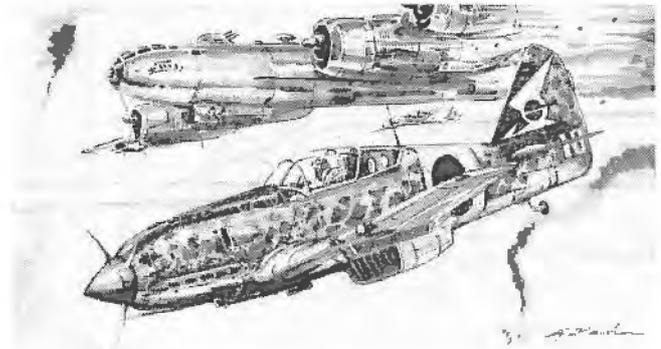
遺体落下地点 三重県久居市元町

中川 裕 中尉

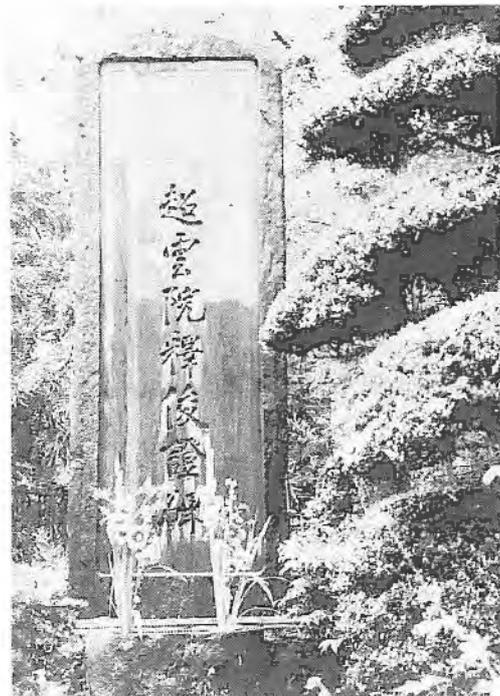
幸 満寿美 軍曹



飛行第47戦隊震天制空隊幸軍曹は昭和20年1月9日二式単戦に搭乗、成増飛行場上空一万余に於て「幸軍曹只今より攻撃」と放送し、東方へ脱出しようとするB29・11機編隊の最左翼機の一番エンジン部に体当たり撃墜、自らも火達磨となって散華した。大分市下志町の共同墓地にあったこの墓標は、側面に防衛総司令官の感状が刻まれているが、区画整理の為今はないという。



少飛会 海法 画



涌井 俊郎 中尉

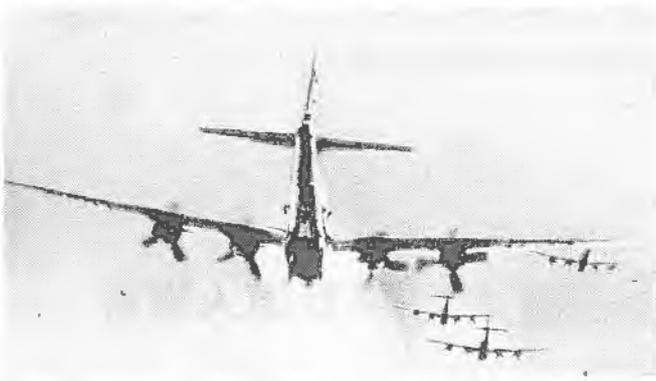
飛行第56戦隊涌井中尉は昭和20年1月3日、三式戦に搭乗して名古屋上空の防空戦闘で、B29に体当たり撃墜して散華した。新潟県上越市高和町にある墓標。

故陸軍准尉野辺重夫君 故陸軍軍曹高木伝蔵君

之碑

飛行第4戦隊の野辺軍曹と高木兵長は昭和19年8月20日、二式複戦に搭乗し折尾上空でB29編隊の長機に体当たりし、後続一機も巻添えに一挙二機を撃墜し散華した。

この碑は福岡県北九州市八幡区大膳町にある。戦争中に折尾町長が中学生の勤労奉仕を得て建てたものである。



大分県下毛郡三光村八面山平和公園内に、昭和45年5月に地元の人達が米軍の慰霊碑と共に建てた。毎年5月に慰霊祭を行い、在日米軍の代表者も参列している。

村田軍曹の碑



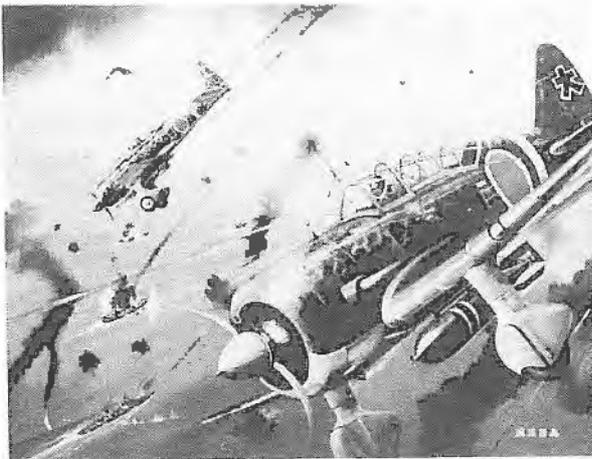
米軍の慰霊碑

飛行第4戦隊の村田勉曹長は昭和20年5月7日、二式複戦に搭乗し中津市三保城山上空でB29に体当たり撃墜散華した。

山本少尉の句碑

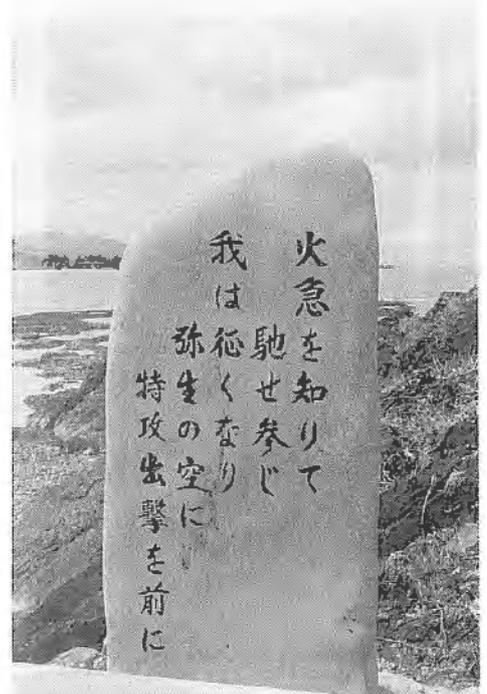


山本三男三郎少尉は飛行第4戦隊回天制空隊長で、昭和20年4月18日二式複戦に搭乗、山口県小郡上空でB29に体当たり撃墜し散華した。この句は故人が覚悟の程を述べたもので、下関小月町蓮成寺境内の戦隊碑の傍に建っている。



海法画

藤野道人軍曹



藤野軍曹が在満の飛行部隊から特攻隊に選ばれたときの作



藤野軍曹は105振武隊の一員で、昭和20年4月22日九七戦に搭乗知覧を特攻出撃、沖縄に向う途中徳之島上空で敵戦闘機と空中戦闘となり、近くの海に不時着戦死した。島民が遺体を収容し茶毘に付し懇に弔い、遺骨も遺族のもとに届けられた。この碑は昭和54年に遺族が建て、その傍にある詩碑は翌年同期生である少飛11期の有志が建てた。関連記事は平成5年3月発行の会報17号にある。

B 29 に体当りした人々

—小月会提供の資料より—

小月会とは飛行第四戦隊の戦友会であるが、この会の事務局田原進軍男氏より、B 29 に体当り撃墜し散華した同戦隊の人達に関する当時の記録、新聞記事、戦友の思出記などの提供を受けた。それらは追々紹介してゆき度いと思いが、今回は前掲の碑に名前の出ている人々のものを掲載する。

野辺軍曹・高木兵長 戦死の状況

昭和19年8月20日の夕刻、中国成都基地を発進したB 29 約七五機が数梯団に分れて北九州地区に來襲し、初の高々度・昼間爆撃を行った。16時32分空襲警報が発令され、同時に各戦隊に全力出動が下令された。第四戦隊は延べ二八機が出動し、撃墜一七機（内不確実八）撃破一七機の戦果を挙げた。野辺重夫軍曹機は17時30分頃、折尾上空で八機編隊の第二梯団長機に体当

たりを敢行し、後続一機を巻き添えに一挙二機を撃墜した。本土空襲でB 29 体当たり第一号で「野辺に続け」が戦隊の必勝信念の根幹と成った。

野辺機が墜落した北九州市八幡区折尾大膳町の森の中には、野辺軍曹・高木兵長の慰霊碑が建立されている。命日には遺族・戦友・地元の方々等によって、慰霊の行事が行われております。土地の方松尾様が土地を提供され碑前に広場があり、何時も綺麗に維持されております。

慰霊碑の横に掲示版があり、会員樫出勇氏の手記による「野辺・高木両勇士の戦記」が掲示されている。

末尾に兩名は身をもって皇土を防衛すべく烈々たる責任観念に透徹し、崇高なる精神と壮烈なる行動をもって皇国軍人の真面目を遺憾なく發揮し、國軍の龜鑑となった。このことは早速上聞に達し、野辺・高木両友は二階級特進の荣誉に輝き、悠久の大義に殉じ、この地に永眠されることとなった。と結んである。

野辺軍曹の思い出

武関高久（少飛12期）

19年8月13日（日）の晩、野辺軍曹を下士官室に訪ねた折、丁度三人の下士官が、航空加給の角瓶のウイスキーを飲みながらB 29 の邀撃戦に就いて、話を弾ませていた時である。野辺さんが、突然言い出した事が、余りにも印象的であったので、私の脳裏に焼き付いて、この事だけは良く覚えていた。

「今度B 29 がやってきたら、体当たりして見せる。しかも編隊長機を狙って体当たりする。そしたら後続機にその破片が当たり、一度に二機撃墜することになる。」と、それから一週間後北九州空襲があり、小月基地から北九州の空を眺めていたら、突然火の球が上がった。何か野辺さんの体当たりを思わせるものがあつたが、一週間前に野辺さんが、言った事が、現実になつて、一挙B 29 二機撃墜になった。四十八年前の事であるが、野辺軍曹の逸話はないかと、ご要望があつたので紹介する。

少飛の先輩として後輩の指導には、極めて厳しく、台湾教育飛行隊教育終了の後輩六人が小月赴任のため重爆撃機で大刀洗飛行場に到着した。途中福

岡に一泊して、次の日小月基地に到着した。野辺さんは、後輩に向かって、「大刀洗にいたら、遅くなってもその日のうちに小月に到着しろ」と、どなりつけ、ピントを食らわして、厳しい指導をしたそうです。

飛行第四戦隊で体当たりを敢行したものの約八機、そのうち三機は目撃者も多く、B 29 も地上に落下したので、搭乗員は二階級特進の栄に浴している。体当たりは非常にむずかしいと試みた隊員が言っている。村田曹長の場合には数回に亘って試み、漸く目的を果たしたものだ。体当たりもB 29 の尾翼に引っかけ、自分は落下傘で脱出する事も試みたが、落下傘で下りる途中を銃撃され、生還することが、極めて困難であつた。戦争末期は艦載機の來襲が多く、屠龍による昼間にB 29 を攻撃することは、不可能に近かつた。

山本三男三郎少尉の 新聞記事

昭和20年4月18日未明、敵機來襲との報告を受け午前7時4分に飛行場（雁の巣）を飛び立ち、同23分に敵機を発見した。それは大刀洗上空で西南

に進行中のB29一〇機編隊であった。山本少尉機は、大刀洗上空を襲おうとした敵の一機に向かって襲撃し、弾丸全部を撃ち尽したので、小郡上空で、7時30分念願どおり敵機に「体当り」を決行した。墜落したB29一機は、一面の菜の花畑のただ中にぶすぶすと燃えながら残骸をさらけ出していった。片方の翼は付近の農家に引っ掛かり、搭乗員八人の死体が転がっていた。

体当りした山本少尉は、折れた操縦桿を握ったまま大破した愛機と共に小郡村下町附近の広場に不時着した。早落部落の人や戦友達によって自動車で久留米陸軍病院に運ばれた。昏睡状態にあった少尉は、突然目をカッと開き「山本の勝利か」と二度も三度も叫んだ。そばにいた軍医は「安心せよ敵機はやつつたぞ」と答えると、にっこりと笑いを浮かべて目を閉じた。時に12時28分であった。

一、B29体当り目撃記「西日本新聞」

(吉浦記者)

麦の緑と菜の花の黄色に色どられた久留米平野を敵は四度襲った。この日記者は、はからずもここでわが軍の凄絶極まりない体当り撃墜を目撃した。

4月18日午前、エンジンの音を大空一杯に広げ四発のプロペラを光らせてB29の白い巨体が鈍い銀色に輝いてい

る。『畜生ッ』と思ったとたん聞き馴れた友軍機の爆音が響いて来た。山本少尉機である。『頼むぞ!』と、つぶやきながら無言の声援を送れば、答えるかのごとく友軍機はグツと反転して、そのまま猛鷲にも似て空高く真一文字に敵編隊に突っ込む。声も出ない物凄い空のなぐり込みである。握りしめる両手は汗で一杯になり、頭上に響く敵、味方の激しい機銃音に味方機無

事なれと祈るのみである。友軍機の一機が敵一〇機編隊の右方最後尾の一機に、上から逆落した果敢な突撃を敢行する。『あつ、あぶない!』と、思わず口をついて出た言葉とともに敵味方は一瞬の間にすれ違う。すれ違ったと見る間にB29の左翼は吹き飛び、瞬間機体から火を吹き、ゆるい弧線を描きつつ落下、その下方に友軍機が小さな火の玉となって急降下の姿勢その儘でグングン下降して行く。……ああ、わが軍独特な体当りなのだ。炎となった敵機は大空に最後の足掻きを見せて、よろめきながら遁走を試みたが、ついにガソリンに引火したのであるう、空中爆発を起こして残る右翼も飛散し、胴体は二個に裂けて散り、矢のごとく緑の大地に吸い込まれ、地獄の劫火のごとく黒煙を上げて炎々と燃え続けている。ふり仰ぐ村人たちも、じっと合

掌し今眼前に見た壮絶な体当り機の冥福を祈るかのごとく静かに頭を垂れている。目を閉ずればありありと臉にある薄桃色の炎がよみがえる。全員がしびれるような感激である。

(昭和20年4月19日・西日本新聞)

村田曹長戦死の状況

昭和20年5月7日午前8時頃から、B29約六〇機が九州各地の飛行場を爆撃した。この日の戦闘で回天制空隊の村田曹長が、中津市三保城山上空でB29に体当りして散華し、金子・青木両軍曹も豊後水道上空で体当たり戦死した。又今井大尉(松山少尉)も宇佐上空の戦闘で、被弾して、院内の山中で戦死した。

村田曹長が4日の戦闘から帰還して愛機から降りた直後に、「当たるのは容易じゃないわい、当たる直前になると自ずと操縦桿が動いてしまうのでなあ……」と言って、大きな目玉に豪快な笑みを浮かべていた。

5日に帰還した時は、「今日も駄目だった……」と呟いていた。だが、7日には申し合わせたように、村田・金子・青木の回天制空隊の三隊員は、生きて再び小月の土を踏むことは無かったのである。

村田曹長機は体当り後、中津市三保区洞ノ上の山中に墜落し、B29(乗員十一名)は大分県下毛郡三光村八面山中の腹に墜落した。

二十数年前日米両国の協力で西国戦死者の慰霊碑が建立され、翌年この地が八面山平和公園と命名された。毎年日米合同の慰霊祭が行われてきたが、最近では毎年5月3日平和祭として年々盛大に世界平和を願っての行事が繰り広げられている。

その八面山平和公園での平和祭は本年で二十四回目になります。『平和の火』を灯すようになって七回目になります。今年には平和の火塔が建立されまして、「恒久平和の火」の塔に点火式が行われます。

「村田曹長辞世の歌」

大君の御盾となりて大空に
散る身思わば心嬉しき

村田曹長の所属陸軍航空部隊
飛行第四戦隊・回天制空隊(小月航空
基地)

搭乗航空機
二式複座戦闘機 (屠龍)

B 29 に体当りした人々

—陸士56期生追悼録「礎」より—

山本敏彰大尉

岡林 竜之

(当時の町内会長三角隆三氏ほか地元の人々の談に拠る)

20年4月7日10時すぎ、立川方向から飛来したB 29約三〇機の編隊に対し、戦闘機三機が執拗に攻撃を繰り返しながら上尾上空に達した。後上方から攻撃していた二機(長・山本機、僚機・賀集機)のうち僚機が被弾、大宮方向に自爆したとみるや、山本機は敢然、B 29の後尾に体当たり、瞬間、B 29は火を発し、あと、白煙を引きつつ退避したという。山本兄は、機が分解すると同時に空中に投げ出され、補助傘は開いたものの主傘が開かず、落下傘は、帯状のまま回転しながら大地に激突した。

駆けつけた人々の手で、人工呼吸が試みられたが、脈も呼吸も回復せず、医師が、空中衝突のとき、すでに、絶命していたのではないかといったほ

ど、安らかな死顔

であった由。

B 29は後日、三角氏や軍関係者によって、銚子沖に

墜落しているのが確認されている。遺体には全く被弾なく、もつれ合った落下傘の紐が恨めしかったと、地元の人々は述懐しておられる。

うかがったお話から判断するに、高度二千米程度で行なわれた戦闘らしく、僚機を落された山本兄が、必墜を期して後上方から体当たりを敢行、衝撃の瞬間に失神して投げ出され、自動曳索環で補助傘が開いたものの、主傘が湿っていて遂に開かず、失神したままで大地に激突したように思われる。

身体に被弾していないのだから、体当たりの衝撃で失神さえていなければ、主傘も、自らの手で引きずり出すことが出来たはずだが、山本兄の熾烈な攻撃精神は、中途半端な空中接触的体当たりなど許さなかつたのである。いや、飽くまで刺し違え、必墜を期し、生還など考えてもいなかったに違いない。

三角氏はじめ目撃の地元の方々の証言と、お力添えで、山本兄の体当たりが軍に確認され、個人感状が授与された。

お通夜、火葬と、地元の方々の好意

で行なわれ、二十五年後の今日に至るまで、4月7日の命日には、地元の方々が花を捧げ香を供えて下さっている。武人の本懐、これに過ぐるものはないであろう。

吉沢平吉中尉

昭和20年3月9日 朝日/読売/毎日新聞から

陸軍省発表(昭和20年3月8日)

昭和20年2月10日、B 29の関東地方来襲時、敵機に体当たりを敢行し、また、マニラ市附近において、潜入敵機を爆砕して、抜群の武功を奏し、感状を授与せられ、本8日、畏くも上聞に達せられたる者、次の如し。

(注) 吉沢中尉以下の姓名略)

—なお、読売新聞紙上には

「生粋の戦闘機乗り 吉沢中尉」

吉沢中尉は、さきに感状を授けられた栗村准尉、幸萬寿美軍曹と同じ基地の、同じピストの先任将校として、邀撃戦の合い間に、いつ行っても、隊長に代り、あとにつづく若鷲たちに、猛訓練をつけていた。

小柄な身体に包み切れない闘志を沸らせ、生れながらの戦闘機乗りといった感じで、そのきびしさは、ほかの基

地にまで知られていた。

しかし、ふだんは見るからに快活であった。敵の都心爆撃の邀撃戦から帰って、地上へ降りると直ぐ、「珍らしいものを見せてあげよう」と、整備員を、愛機のそばへ連れて行った。敵の弾丸は、直正面からプロペラの間をくぐり、方向舵の薄い板を縦に撃ち抜いていた。

「この見当だと、座席の上をストレスレにかすめたのだ。命拾いしたよ」と、首をすくめて見せた。

敵の第二目標、一〇機編隊の右外側機に、側前方から、ほとんど同高度の攻撃をかけ、見事に、これを撃墜したのであった。

この珍らしい弾痕の示す激しい戦法こそ、戦闘機乗り吉沢中尉の真骨頂を物語るものである。

栗村、幸而勇士が、体当りしたあと、「震天隊」の鈴木曹長が、「ひと足、遅れてしまった」といつているのを耳にして、「なに、焦ることはない」と諭した中尉自身が、去る2月10日、大挙して群馬県太田附近に來襲したB 29の編隊を迎えて奮迅、小泉上空において、敵一機を体当り撃墜し、自らも愛機もろとも、天空に散ったのであった。

涌井俊郎中尉

遺 信―父あて(戦死二日前、昭和20年1月1日夜)

新年、おめでとうございます。元旦の晩といながら、本日は緊急勤務でピストに待機しております。ただいま、B29の通信情報が頻繁に「厳戒ヲ要ス」と入ってきて、新年らしい気分は少しもありません。

それでも、家では私も計吾(弟)もいなくて淋しいながらも、無事、新年を迎えられたことを存じます。

和代さんとの件、話が余りに早くなってしまいました。もちろん、家でも女手なく、御苦労のほど、お察しいたしますが、当方では、毎日の本土空襲の状況が入手され、今日か明日の命と思っておる次第で、家のことを考える暇もないくらいです。

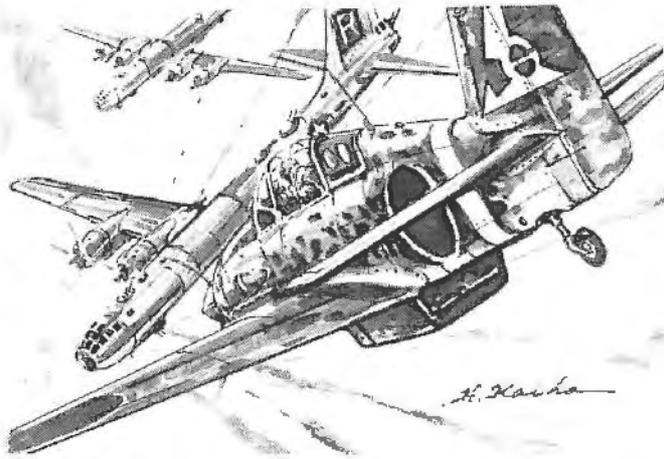
四発の超重爆を墜すには、真に捨て身にならねばなりません。10数機の編隊、しかも各機20数門の機関砲を、火花のように撃ってくるなかに、単機、突進するのですから、毎日、これで終りだと思っております。

陸軍特攻隊の中尉の隊長は、みな、56期で、幾多忠烈なる同期生を出し、また内地、あるいは比島に特攻隊中隊

長たる同期生を思うとき、われわれも同期生の名を恥づかしめないようにと、新年に当り、決意を新たにしております次第です。

由来、生死は不可論といわれておりますが、悠久の大義に生くる、われらの同期に遅れをとらざる如く、皇土防空の大任を完遂いたしたいものと念じております。

健一も慎一も健康の由、何より。父上にも、このごろ、心身ともに衰弱される一方、折角、御自愛のほど、お祈り申しております。



少飛会海法 画

万世の特攻隊慰霊祭に

参列して

副会長 田 中 耕 二

四月十日鹿児島県加世田市の特攻隊慰霊祭に参列。

朝、東京発飛行便にて鹿児島へ。空港で偕行会員の出迎えを受けその車で約二時間半、万世着。

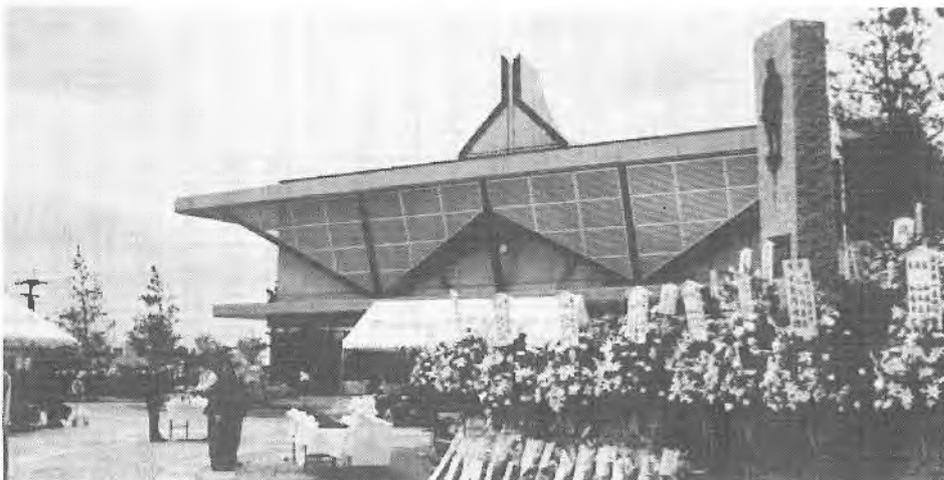
万世飛行場へは沖縄作戦中一度訪ねたが、戦後気になげながらも果たせず、今回漸くにしてかない、英霊に対し改めて感謝とお詫びを申し上げる機を得た次第。

慰霊祭には全国各地から多数の御遺族、戦友が参加され、市側からは市長さんを始め関係者多数御参列、文字通り市をあげての祭祀。陸上自衛隊音楽隊の昔懐かしい「国の鎮」や鎮魂の曲。日曜日にかかわらず鹿屋よりは対潜哨戒機の上空よりの慰霊飛行。

出席者それぞれの感懐を胸に秘めての献花。老生も今迄の不参を詫びつつ之にならう。

特攻隊の英霊に対し改めて感謝、尊崇の念深うすると共に、大東亜戦争を自ら「侵略戦争」と公言し、首都に於ける特攻慰霊祭に国を代表して参拝な

き首相に対し改めて痛哭、悲憤。国の為進んで一命を捧げられた英霊に感謝なきは砂上の楼閣の誹りを免れないであろう。



市長の祭文奏上

特攻隊員指名は命令か志願か

—陸軍挺進部隊の場合—

田中 賢一

特攻隊員は命令によって決まったのか、志願者をもって充当したのかは、よく話題になる問題である。私は広く資料を収集した訳ではないが、陸軍挺進部隊内のことだけは実情を知悉しているので、後世の為に書き残しておきたいと思う。

レイテ空挺作戦

昭和19年12月6日に行われたレイテ空挺作戦について、初めの計画では既にルソン島クラーク地区に到着している挺進第三聯隊を使って、レイテ島ブラウエン北と南及びサンパブロの三つの飛行場を奪取する計画だった。ところが輸送船の都合で遅れて到着した挺進第四聯隊が、自分達も第一次挺進に入れてくれと強く主張した。第二挺進団（団長徳永賢治大佐）としては第四聯隊は第二次以降にブラウエン北飛行場に注ぎ込む積りでいたが、丁度その頃、挺進飛行隊が従来の三個中隊から四個中隊に増強されることを知った。第二挺進団に編合されているのは

飛行中隊三個の挺進飛行第一戦隊（戦隊長新原季人中佐）だったが、これでは機数不足と思っただろう

う、大本営の指示で新田原にいた挺進飛行第二戦隊から一個中隊（中隊長三浦浩大尉）が第一戦隊に配属となった。これら飛行部隊は損害を避けて直前まで台湾の嘉義に待機していた。そのようなことで挺進団としては部署の変更を考えているとき、もう一つ問題が提起された。

抑々この空挺作戦の目的は何なのかから聞かされた作戦目的は、第三十五軍の和号作戦に呼応してブラウエン飛行場群を覆滅することにあつた。ところがクラーク基地の南サンフェルナンドに入って全般状況を知ると、敵航空の活動を封ずるためには、ブラウエン飛行場群を抑えただけでは不十分で、タクロバンとドラグまでも抑え込まねばならないと痛感するに至つた。このことを強く主張したのは第三聯隊長白井恒春少佐であつて、遅れて到着した第四聯隊長齊田治作少佐も直にこれに同調した。この意見を挺進団長に申出ると、団長は第四航空軍に具申した。航

空軍ではすぐにこの案を採用し、輸送機の不足を補うため74戦隊と95戦隊から強行着陸用としてそれぞれ重爆二機を差出すように部署した。

（以上の経緯は挺進団司令部部員弘中少佐、第四聯隊付塩崎少佐が戦後語つたことに拠る。兩人とも既に故人である）

さて、これから先が主題の本論である。主力が降下するブラウエン飛行場群には、第二十六師団が脊梁山脈を越えて翌日進出すると聞かされていた。実際は軽装備の僅かな歩兵が密林をかき分けて山の中を西進しているに過ぎなかったが、挺進団では師団というからは、諸兵連合の部隊を想像していた。しかし、レイテ湾に面するドラグ及びタクロバンは、ブラウエンから20キロも離れており、特にタクロバンは敵上陸軍の中樞であり、ここまで地上進攻できるとは誰も思わなかった。

従つてここに降着する部隊は収容の見込みが全くないので、特攻隊というこゝとで部署した。

本来ならば建制部隊を充てるべきところであるが、第四聯隊の強い希望を入れて、タクロバン攻撃の降下部隊として第四聯隊から一個小隊を、強行着陸部隊として第三聯隊から一個小隊を差出すことになった。第三聯隊では強

行着陸の重爆二機に搭乗する者を志願させた。第一回にブラウエン地区に降下するのは一、二、四の三個中隊ときめていたが、各中隊は割当機数の制限で一〇〇名足らずしか連れて行けない。タクロバン特攻隊の志願者を募つたところ、各中隊で第一次挺進の選に洩れた者が一斉に名乗り出たという。タクロバンに向う途中、レイテ湾上で対空砲火で撃ち落され、一晚海上に浮遊して夜が明けて捕えられ生還した一曹長の言によれば、南サンフェルナンドに来てから航空特攻の話聞き、どうせ死ぬなら華々しく戦つて死のうと最先に手を挙げたという。

一方四聯隊から選出した小隊については聯隊長が榊原大尉を呼んでタクロバン降下の隊長を命じた。榊原は陸士55期で直前の12月1日に大尉に進級した。中隊長の席はないので彼は本部付になつていた。聯隊長が榊原にタクロバン行を命じたのは理由があつた。前年の（昭和18年）の6月18日榊原が計画指導した演習で、宮崎県高鍋町を流れる小丸川を渡渉する場面があり、上流の方に豪雨があつて増水していた為、押流されて八名が殉職するという事故があつた。そのとき彼は責任を負つて自決しようとしたが、聯隊長に戦場で必ず死場所を与えろと言われて

思い留った。そのときの聯隊長は前任者だったが、この件は申送りになっていたらしい。勿論彼は喜んでその任に就いた。連れて行った三十数名の部下はどのように選出したのか、そのことを伝える者はいない。榊原は小丸川で殉職した八人の位牌を抱いて輸送機に乗り込んだという。

ドラグに降下する方の部隊は、飛行場を襲撃した後敵中を突破しブラウエンに来ることを、挺進団長は期待していた。第四聯隊では宮田中尉の指揮する第二中隊を当てた。またこの目標にも強行着陸機二機を割当て、それには第三聯隊作業中隊から一個小隊を差出した。指揮官は竹本中尉だった。徳永団長はこの二人に対し、必ず敵中を突破してブラウエンまで戻って来いと論じたが、二人はそのときどう受留めていたかわからない。(徳永団長はブラウエン飛行場が確保できたらここに進出する積りだったが、それは実現しなかった)

またタクロバンに向う部隊に対しては、アンフェレスを突進する直前に、一人一人手を握り「死に急ぐな」と言った。これは前述のレイテ湾で捕虜になった第三聯隊の一下士官の証言であるが、この人は——それだから捕虜になったのではない、救命胴衣を着て

いたので浮いていたが、夜が明けて見たら周囲には敵の軍艦が一杯いて、鉤にひっかけて引揚げられた。殺せ殺せと叫んだが艦の営倉のようなところに放り込まれた——と述べている。

一方挺進飛行戦隊では、トラッグとタクロバンに向うのは、第二戦隊から配属になった三浦中隊とした。これは途中で分進することになるので、建制の保持上からもそうなるのが順当だろう。計画では三浦中隊九機のうち七機は四聯隊第二中隊を載せてトラッグへ、三機は榊原小隊を載せてタクロバンに向うことになっていた。どちらも落下傘降下であるので、無傷であれば輸送機は帰って来れる筈である。ところが三浦中隊長は到底そのようなことは望めないと判断したのであろうか、出発直前になって全機着陸せよと命じた。これはレイテ湾に撃墜されて捕虜になった操縦者の証言である。このことについては本誌12号と13号に畠山卓次氏の投稿文が載っている。三浦中隊は全機未帰還であるが特攻隊としては扱われていない。

初めから強行着陸機として74戦隊と95戦隊から差出した重爆各二機、搭乗員は両戦隊共に五名であるが、その人達の人選はどのように行われたのか不明である。勿論全員未帰還である。な



アンフェレス飛行場で内地に帰るといふ報道班員に手紙を托す

お両隊に対する四航軍の感状によれば、四機ともタクロバンに向ったことになっていたので、アンフェレス出発直前に三浦中隊はドラグ着陸、重爆四機はタクロバン着陸に変更されたりし。何れにしてもレイテ湾岸沿いに進入した部隊で、生還者は湾内に浮遊して捕えられた者、三聯隊二名、団司令部一名、三浦中隊一名以外にはなかったらしい。

義烈空挺隊

19年11月下旬、宮崎県唐瀬原基地にあった第一挺進団に対し、教導航空軍からサイパン攻撃のため一個中隊差出しの命令が届いた。第一挺進団は三カ月前にスマトラから内地に帰ってきた、十一月二十五日には新に編成された挺進集団に編合されるのであるが、その直前で、挺進団長は河島慶吾大佐だった。第一挺進団は挺進第一、第二の両聯隊で、聯隊は重火器中隊を入れて五個中隊より成り、中隊長は全部で一〇人いる。河島大佐のみるところ、

第一聯隊第四中隊長奥山道郎大尉がこの重任を果すのに最適と思った。陸軍落下傘部隊創設の初から研究に携った間柄で、人物を知り尽くしていた。このことは河島慶吾氏（故人）の述懐による。

河島団長は第一聯隊長山田秀男中佐を団司令部に呼んでこのことを話すと、聯隊長も全く同感だった。さて、聯隊長はどのようにして奥山に伝えるべきか、悩んだ跡がある。司令部から聯隊に戻った時刻は遅かったのか、奥山が不在だったのか、伝えるのは翌日になったらしい。翌朝出勤する途中路傍でバスを待っている数人の将校を見かけ、四中隊の一人の将校だけを聯隊長の乗用車に乗せ家庭のことなど細々と尋ねた。この人は後に沖繩に出撃するが不時着して生き残る。その述懐によれば、この時の聯隊長の表情や話し振りは深刻で奇異に感じたという。

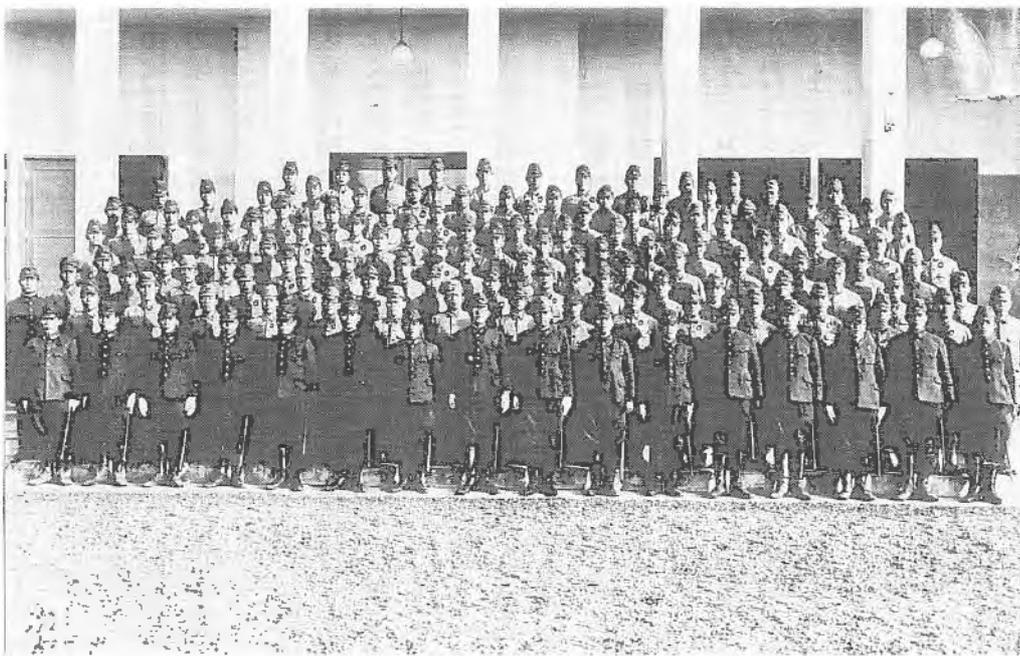
山田聯隊長も聯隊付の弓削少佐も既に故人であるが、弓削忠氏が生前語ったところによると、聯隊長は聯隊長室に奥山を呼んで、昨日団司令部で聞いたこと、即ちサイパン基地制圧の必要性、大本営で考えている方策などを説明した。奥山に対する具体的な任務まで話が及ばないうちに、彼は「その指揮官を私にやらせて下さい」と力強く言い切った。挺進団から差出す人員は一二六名と指定されていた。その人員を聯隊内で志願者を募って編成するかということ、そのあと協議したが、奥山は自分の中隊だけで編成したいと言った。聯隊としては奥山隊が出たあとも第四中隊は存続させたかったの

で、他の中隊から何十人か奥山隊に転属させ、その上で奥山に連れて行く人員を選出させるということになった。結局一二六名は奥山の指名によってきまった。不時着して生き残った者の述懐では、中隊長が征くのだから自分達がいて行くのは当然だと、何の抵抗も感じなかったという。

奥山隊がサイパン攻撃の準備訓練のため、12月7日に豊岡（現在の入間基地）に移動するのであるが、そのとき中野学校出の将校八名と下士官二名が加わった。この人達はサイパンに潜入する為に加ったのであるが、サイパン特攻が取り止めになった後も奥山隊の一員となっており、最後は同じような戦闘員として沖繩に突入した。とこ

ろでこの人達の人選の実情について、不時着生残りの熊倉順策少尉は次のように言っている。

19年11月末、陸軍中野学校二俣分校で丙種学生の卒業式が行われた。丙種学生とは幹部候補生出身の見習士官で



豊岡に勢揃いした奥山隊

あり、そのときの卒業生は約二〇〇人で、余談ながらその中に戦後三十年間ルパン島で頑張り通した小野田さんがいた。卒業の少し前に——サイパン島に潜入諜者を送り込む計画がある、志願者はないか——と言われ、真先に手を挙げた者六名が指名され、参謀本部付に発令された。そのときは義烈空挺隊に入ることには知らなかった。

この六人の見習士官が参謀本部に出頭すると一年先輩で中野学校出身の少尉二名が加り、更に中野学校から来たという通信特攻の下士官二名が加り、潜入諜報要員は合計一〇名となった。二俣分校を卒業した六名以外の者はどのようにして選抜されたのか、伝える者はいない。この一〇名は奥山隊の一員となり、サイパン特攻が取りやめになっても転出することはなく、最後は沖繩に突入し、不時着機に乗っていた熊倉順策氏以外は戦死した。

次は奥山隊を乗せて行った第三独立飛行隊のことであるが、沖繩に行く途中不時着しそのときは死ななかつたが、部隊が消滅したため60戦隊の所属となり、沖繩の地上軍に対する物料投下などに出撃して未帰還となった。

従って人選の事情について尋ねる相手がいないが、志願者を募ったのではないらしい。

以上は陸軍挺進部隊の行った特攻作戦について、それに加わった人達はどういうにして選抜されたのかを振り返ってみたのであるが、この人達が書き残したものや、運命のなせる業で生き残った人の述懐談などによれば、皆が確たる信念に基いて行動していたことが窺えるが、それはまた別の機会に述べたいと思う。

未発に終わった特攻作戦

陸軍挺進部隊には、これ以外に終戦のため未発に終わった特攻作戦が二件ある。その全容を述べると長くなるので、本稿主題に係ることだけ簡単に述べよう。

その一つは海軍の計画した「剣作戦」である。夜間B-29来襲の編隊に、襲撃部隊を一式陸攻に乗せて続行させ、サイパンとテナヤンの飛行場に着陸させ、これを覆滅しようという構想だった。海軍の特別陸戦隊だけでは兵力が足りないので、第二剣部隊として陸軍に差出しを求めた。そこで順序を経て当時千葉横芝にいた挺進第一聯隊に二個中隊の差出しが命ぜられた。

七月のある日、大本営から細部指示を受けるため山田聯隊長は本部付の園田直大尉を伴って市ヶ谷台に出頭し

た。園田大尉は戦後外務大臣にまでなった人材だが、幹部候補生出身の特志願将校で、落下傘部隊には早くからおり、第一聯隊では中隊付将校、ついで中隊長を勤め、この頃は本部付となっていた。聯隊長がこの人を連れて行ったのは、他意あってのことではないように思う。聯隊付佐官は弓削少佐で、当時横芝飛行場はよく空襲があるので、弓削少佐を留守番に残せば随行するのは園田大尉ということになる。以下は園田直氏が戦後私に語ったところに拠る。

それは7月末のことだった、聯隊長に随行し大本営に出頭し、晴気参謀から具体的な指示を受けた。そして退出するとき、晴気少佐はしんみりした口調で——この戦勝っても負けても我々は生きてはおれない——と言った。園田はこのとき単に特攻隊を出す上級司令部の主務参謀の苦衷と感したが、戦後になって晴気少佐がサイパンの第三十一軍参謀に発令されていたが、そのとき既に赴任の手段がなかったこと、そして終戦直後市ヶ谷台上で自決したことなど知って、あのときの一言思い当るふしがあったという。

聯隊長と園田は横芝に戻るため千葉まで来たとき、空襲のため電車は動かなくなり、逃げまどう市民を見て園田

は言った——今度のサイパン行私がやります。どうせ皆永くはない命ですから——と。聯隊長は貴公行ってくれるかと手を握った。以上は彼が衆議院副議長当時、私の問に答えて述べたことである。

海軍総隊司令長官小沢治三郎の指揮下に入った陸軍挺進部隊は、園田大尉指揮の挺進第一聯隊第一、第二の二個中隊だった。

次は私自身のことを述べる。私は19年11月陸軍挺進練習部が挺進集団に改編されるとき、挺進練習部付から挺進戦車隊長に転任となった。この部隊は世界に類のない滑空機搭載の戦車部隊である。戦車搭載用の滑空機「クー7」の実用化を見越して、前年の8月に編成され、私は二代目の隊長である。航空機生産が思うに任せず、その皺よせを受けて「クー7」は量産に移る前で終戦になってしまった。

戦車隊の中には戦車中隊のほか自動車中隊があった。この中隊は諸兵連合の大空挺作戦が行われる際、空挺堡内で使う輸送隊という構想で編成されており、便宜上戦車隊の中に入れていた。ジープに似た小型トラックを持っており、これは滑空飛行戦隊の装備している「クー8」に搭載できた。

20年になると戦車はもとより、小型

トラックを空輸するような空挺作戦が

行える見込みは全くなかった。当時
我が隊は宮崎県の唐瀬原にいたが、敵
艦載機の空襲を受けたり、近くの兵舎
にいた奥山隊（義烈空挺隊）がいつの
間にか消え失せたかと思うと、沖繩突
入のことが伝えられたりして、我々は
どのように使われるのか、またどのよ
うな場面を設想して訓練したらよいの
か、考えさせられることが多かった。

私は隊長として戦車中隊の訓練の方に
頭が向いていたためか、自動車中隊に
ついては成りゆき任せだったように思
う。自動車中隊長広田敏夫大尉は実直
気まじめな人で、本土決戦になったら
敵戦車と差違えて死ぬのだと、爆薬を
背負って敵戦車の底板の下に飛込む訓
練をよくやっていた。

そのうちに唐瀬飛行場や降下場の周
囲にも本土決戦の師団が展開し、陣地
構築作業を始めた。6月になると私の
部隊は都城平地に移駐し、第五十七軍
の指揮を受けることになった。軍から
命ぜられた任務は対空挺専任部隊だっ
た。ところが7月のある日突然従来の
隷属系統の航空総軍から沖繩特攻の大
め小型トラック一二輛分の操縦手とし
て隊長以下二四名差出しの命令を受け
た。唐瀬原にある第一挺進司令部に
連絡將校を派遣して、特攻作戦の構想

を承知した。

この作戦は南九州に来襲する敵機の
活動を少しでも減殺するため、「クー
8」に機関砲搭載の小型トラックを載
せ、沖繩の敵飛行場に着陸させ、緊留
してある敵機を焼夷弾で射って廻ると
いうものだった。一車二名の砲手は挺
進第二聯隊から出す。戦車隊からは一
車二名宛の操縦手を出す。その中に全
隊の指揮官と小隊長級指揮官二名を含
む、というものだった。

中央の誰の発案か、思ってもみない
戦法だが命令とあらば従わざるを得な
い。早速広田大尉を呼んで話すと、大
きな眼を輝かして行きますと答え、自
分の中隊から將校は大城中尉と鎌田少
尉を連れて行きます。下士官兵は即刻
人選しますとたちどころに答えた。私
自身、秋には予想していた敵の上陸に
際し、装甲の薄い二式軽戦車に乗って
真先に突進する積りでいたから、広田
大尉の受答えにそれほど深刻な感じを
抱かなかつたが、このような戦法には
多大の危惧を持った。

広田大尉の指揮する部隊は福生（今
の横田基地）に行き作戦準備中に終戦
となった。この人達が死んだ後で終戦
になれば、私は生涯傷心を抱き続けな
ければならなかつた。広田大尉、大城
中尉共に戦後故人となった。

二つの特攻慰霊祭に参列して

—— 侵略戦争発言に対する反揆の声 ——

理事長 最上貞雄

知覧特攻基地

平成6年5月3日例年の通り知覧特攻平
和観音堂の前に於て戦没者慰霊祭が厳肅盛
大に執り行われた。

前夜は鹿児島ニューステーションホテル
にて特別見習士官の方々の懇親会が開催さ
れ、特操会会長家城啓一郎氏の挨拶に引続
き、知覧町長である知覧特攻慰霊顕彰会会
長東 敏見氏の慰霊顕彰事業に対する熱意
溢れる挨拶があった。又今年靖國神社宮
司大野俊康氏も初めて列席された。

当日は生憎の小雨日和であったが全国各
地よりご遺族三〇〇名を含め一、三〇〇名
にのぼる多数の参列者があった。

東会長の追悼の辞について地元選出県
会議員、遺族代表、偕行社代表（陸士57
期）、特操会代表、少飛会代表等の慰霊の
辞が捧げられ、往時を偲び一同感涙に咽ん
だ。

今年の慰霊の辞の中ではほとんどの方が
細川の侵略戦争発言に対する痛憤の言葉が
述べられ、国の為に尊き生命を捧げられた
殉国のご英霊にお詫が申し上げる気持ちが
滲んでいたのが感じられた。

九州に於ける慰霊祭では多くの市長、町
長が奉讃会の会長を勤められ、自衛隊の
方々も全面的に協力され、官民一体の慰霊
祭が執り行われるところが多く、我々亡き

後も特攻隊の遺績は
末永く語り継がれる
であらうと心強く感
じた次第である。

都城特攻基地

平成6年4月6日例年の通り「都城特攻
振武隊はやて慰霊碑」の碑前に於てご遺族
はじめ関係者約三五〇名の方々が参列、厳
肅盛大に慰霊祭が執り行われた。

奉讃会長（都城市長）の祭文に引続き陸
士57期生の門馬秀行氏が追悼の辞を捧げ
た。

「疾風特攻隊の隊長は私と陸軍士官学校の
同期生であります。私はこの事を生涯の誇
りにしております。隊長を中心として年令
も階級も超越し一丸となって突入された隊
員の方々に對して私は限らない親近感を覚
え哀惜の念に堪えません。皆様方は或いは
学業半ばにしてペンを操縦手に握り替え又
は奥様やお子様など絶ち難き恩愛の絆を振
り切り、はたまたあたら人生を花の蕾のま
まに散らした方々の御心情を忍ぶとき申し
上げる言葉もありません……皆様の血を
もって戦い抜き、アジアの国々を欧米の程
桎から解放した大東亜戦争の眞の意義に疑
義を抱くが如き輩の現われるに至っては、
不肖ながらも皆様に後事を託された私共は
誠に痛憤の極みであります」

終って生憎の雨だったので天幕の下で直
会が行われたが、今年細川発言に對して
憤慨の聲が盛んだった。

誠第114飛行隊(二式双襲)の 編成から突入まで

台湾の第八飛行師団に属する同隊の突入までの経過が、生き残った小山介少尉から突入した馬締安正伍長の兄に出した手紙に詳細述べられているので、兄久生殿の了解を得てここに掲載させてもらうことにする。この手紙は昭和29年に出されたもので、それまでは住所不明でお知らせできなかったことを詫びている。なお手紙の前後文等標題に直接関係ない個所は省略させてもらった。

ン周辺における戦闘の様相からして、全員特攻は当然のことと考へていました。

当時第三錬成飛行

隊長は永岡少佐、教育班長は菅浪大尉、操縦関係将校約三十名、下士官約四十名、他に整備班がありました。

日中は、米機の空襲がありました、私共は、毎日早朝訓練をはじめ九時頃までは、飛行機の分散を終えていました。

昭和二十年三月二十三日、整備隊の手伝いをした後で、午後空襲を待避して近くの河原へいていましたがB25の攻撃の終わった午後三時頃、操縦班の集合が命ぜられ、永岡少佐から攻撃隊を編成する旨訓示があり、菅浪大尉から第一攻撃隊員の氏名が発表されました。

昭和十九年の後半頃、台湾軍飛行第八師団に属するもので、双発機への訓練課程にあった私共は、台湾中部の彰化、鹿港の飛行場と北部の桃園飛行場を基地とする第三錬成飛行隊で二式複戦屠龍の操縦訓練を受けておりました。

昭和二十年二月下旬師団参謀の西少佐が来まして、米軍は次の上陸地として沖縄、台湾を目指しており、万一時は、全員特攻となってもいい度いと訓示されました。私共は、フィリッピ

- | | |
|-----|--------------|
| 隊名 | 誠第一一四飛行隊 |
| 隊長 | 竹田少尉 阪大出幹候7期 |
| 副隊長 | 小川少尉 法大出特操1期 |
| 隊員 | 原 少尉 武専出幹候9期 |
| " | 矢作少尉 早大出特操2期 |
| " | 小杉少尉 駒大出特操2期 |
| " | 井上軍曹 少飛出 |
| " | 大井伍長 " |
| " | 藤井伍長 " |
| " | 水越伍長 " |

- | | |
|---|--------|
| " | 伊藤伍長 " |
| " | 増田伍長 " |
| " | 馬締兵長 " |
| " | 伊藤兵長 " |
| " | 内山兵長 " |
| " | 福谷兵長 " |
| " | 以上十五名 |

この発表があっても皆は至極平静でありました。直ちに誠第一一四飛行隊員による編隊飛行の演習がありまして、その夜は送別の宴が開かれ、十五名は相当めいていました。二十四日、身辺の整理をすませ、新品の飛行服を受領し、夕方四時、最も整備のゆきとどいた二式複戦をもらいました。

いつも非常にやかましかった永岡少佐の涙で殆んど言葉にならない別離の言葉に送られ、残る戦友達の打振る手に袂れの翼を振って、発熱の為参加出来なくなった小杉少尉をのこした十四機は堂々の編隊を組んで、三十分後には桃園飛行場に着陸、宿舎に入りました。

兵たん宿舎における取扱も極めて丁寧なものでありました。二十五日から三十日までの生活は、午前中は飛行訓練及び地上における機上無線電話の調整でした。呼び名は、シラネ・シラウマ・シラタカ等々でしたが、後方座席にある無線機の調整

は、偵察者又は後方射手をのせていない特攻機には離陸後の調整ができず、役にたちませんでした。

午後は米機の空襲を待避して、近くの川へゆき毎日、魚をとって喜んでいました。皆、何のくったくもなく和やかで明朗そのものでした。

数日後には、死ななければならぬ苛酷な運命にもめげず、竹田隊長を中心として、兄弟のように慕い合い、固く団結した姿に、同宿の飛行十戦隊の人々は非常な敬愛の眼で応待しました。竹田隊長は、一日おき位に台北の師団司令部に打合せにゆき作戦、情報を伝えました。

宿舎の直通電話によって、常に沖縄周辺の米艦隊の動きが知らされ、十戦隊の司偵からも通報を受けておりました。

沖縄周辺の米艦は、空母を含め大小五百隻にもものぼるといふことで、目標に困ることはないと言喜んでいました。

いよいよ出撃の機も熟し三十一日、八重山群島の宮古島へ出発することに、三十日夜は、師団長から酒、タバコを充分にいただき、馬締兵長や内山兵長など最も年若な人々はさかんに「男なら未練残すな憂き世のことは」「富士の御山に身をすてて」などの

歌を盛んに歌っておりました。宴の半に誠隊の白鉢巻が渡され、御手許に御送りいたしましたように皆、夫々の思いを書き残したのであります。

快晴の三十一日が明けました。午後四時師団参謀長岸本少将、富永参謀が見送りに来られ飛行場で小宴のあと、出発前の写真がとられました。その写真が遺書と共に御送りしましたもので、この二つは兵たん宿舎の水津軍属が私共の出撃中、内地連絡のため新田原へ帰りましてついでに私の郷里へ立寄りまして残していつてくれましたものでございます。残念ながら御遺族の住所が知らされてありませんでした。為、私の父も途方にくれていたものでございます。

午後五時半頃参謀長の壮行の辞に送られて竹田隊長を先頭に機首を宮古島へ向け台湾を後にしました。この時内山兵長はエンジン不調で離陸直後、桃園飛行場にひき返して着陸直後火を発生しましたが、無事脱出、その後再出撃のため本隊より飛行機を受領、桃園飛行場に到着直前機関に故障を生じ、海に不時着、衝撃により戦死しました。

桃園飛行場を飛立った我々は四個編隊(①竹田隊長、井上、藤井、馬締、②小山、大井、水越、③原、増田、伊藤兵、④矢作、伊藤伍、福谷)を組み

約一時間の洋上飛行の後正に暮れようとする宮古島陸軍飛行場に着陸しました。(各機の整備員は、後方座席に宮古島までのせてゆきました。)

全員、自動車で真暗な飛行場から宿舎にゆき、若い声をあげて歌を唄い、たえず明るい笑声を発しておりましたので、飛行場大隊の者は、私共が特別攻撃隊員であり明朝死ぬものであると気付かず、どんな任務できたか、いぶかしがっている程でした。

夕食の後、竹田隊長と私は飛行場司令部の壕の中で作戦指揮の為来島中の師団参謀石原中佐を囲んで同島にいた第二十四戦隊長庄司大尉、誘導機の第七十二(失念?)中隊の神保大尉、飛行場大隊長馬場(失念?)大尉等と打合せ会議に参加し、明朝四時二十分まで

に飛大の手で胴体両脇に二五〇キロ跳飛爆弾二ヶ着装完了、四時五十分出發、誘導機による錫箔散布による電探妨害の後で嘉手納灣の空母を攻撃することを協議して、十時過ぎ宿舎に帰り、皆どうしているだろうかと思つて、部屋をのぞきこんでみますと、夫々高いびきで眠っており何の憂いもない安らかな寝顔でありましたので隊長と二人で涙を流した程でした。

四月二日午前四時、宮古島の上空は快晴、星が一面に輝いていました。竹

田隊長から石原参謀に出発の申告をすませた私共は、はじめて満身に緊張感があふれるのをおぼえました。さあいこう、いませうと互いに肩をたたき合つて、愛機の方へ走りました。しかし、今夜はじめて、戦闘機に二五〇キロ爆弾二ヶを着装する作業にとりかかった飛行場大隊の不手際から作業が捗らず、五時をすぎても第一編隊の出発ができません。

第二編隊の爆装は、五時十分頃に完了したので、第一、三、四編隊の出撃を中止、第二編隊の出発が命ぜられました。神保大尉、渡辺曹長の誘導機二機が離陸、次いで私が離陸し、僚機、大井、水越伍長の編隊をくむのを待ちました。やがて両機が私に近付いてきましたので、私は誘導機に出発を合図しました。ところが、水越伍長が私を見失った様子で遠くそれでゆきますので、私と大井伍長は島の上空を旋回しながら水越伍長のつくのを待っておりました。翼を振って所在を知らせ

ましたが、仲々、確認し得ないようです。そのうち時間はほとんど経過しますので大井伍長は私に翼を振って、袂の合図をして、誘導の渡辺曹長機と共に嘉手納沖へ機首を向けてゆきました。水越伍長は私の翼燈と星を誤認して、方向を誤り石垣島へ不時着したのでした。

私も編隊を組むのをあきらめて、誘導機の神保大尉について、沖繩を目標にかけましたが、すでに夜が白々と明けはじめ、沖繩までの中間程で陽のぼりはじめました。誘導機に戦闘指揮所からの無電で、午後の出撃を待つて、引き返すようにとの命令があり、私も今一步のところで止むなく神保大尉について引き返しました。大井伍長は私に決めるのが早かったのでそのまま渡辺曹長機について日出直前嘉手納灣に到着、米各艦から猛烈に打上げる弾幕について誘導機に翼を振って袂別占位をするや、練習時に違わぬ、正確な二五度の降下角をもって真一文字に大型油槽船に突入之を撃沈せしめております(誘導機の報告等により)。

この大井伍長の攻撃によって、宮古島に特攻機のあるのを知った米軍は、その日は九時頃から二時間程、グラマシ艦爆等によって宮古島に猛烈な爆撃を加えてきました。この為、伊藤伍長、増田伍長の二機が被爆して出撃出来なくなつておりました。陸上部隊の出動による飛行場整備の後、午後四時頃私共は再び飛行場に整列、石原参謀に申告をして御互いにしみじみと顔を見つめ合つて、兄弟よりも濃かつたこ

の十日間程の縁をなつかしくかみしめながら心から快れを告げ合いました。

此の時は編成が変更され、第一編隊、竹田、井上、藤井、第二編隊、小

山、矢作、馬締、第三編隊、原、伊藤兵、福谷となっており、第二編隊より出発が命ぜられ、誘導機渡辺曹長機に次いで私が一番機として出発しましたが、エンジンとフラップの不調で二米以上浮揚せず、そのまま丘のすそに激突し、機体は大破しましたが爆弾も破裂せず、軽い打撲のみで、奇跡的に生命を拾いました。

大破した愛機からどび出した私の頭上をこうこうと爆音も高く、矢作少尉、そして馬締兵長、竹田隊長と帰らざる戦友たちは翼を振り乍ら一機又一機と編隊を組みつつ米艦撃滅に向って壮図につきました。

ただ、福谷兵長はエンジン故障のため離陸間もなく海上に不時着し、救出されました。

宮古島から嘉手納湾までは爆装のため二〇キロにおちた二式複戦の脚で六五分を予定しておりましたが、離陸後四五分程の海上で遊ぶ中の米艦隊と遭遇し、米艦は猛烈な弾幕を張ったようでありすが、誠第一一四飛行隊員は、翼を振って直ちに戦闘隊形に開き、確実に占位し、矢作少尉から相次

で突入し、戦艦一、巡洋艦二、大型船一を撃沈しております。以上の戦闘詳報は渡辺曹長の無電報告および帰投後の報告であります。

渡辺曹長機も、追尾の米機に魚釣島近海で撃墜され魚釣島に漂着中救助されました。淡々として死地に赴き整々たる秩序と固い団結のもとに大戦果を揚げられました竹田隊長以下原、矢作、井上、大井、藤井、馬締、伊藤の八柱に対しまして、山本師団長、岸本參謀長は満腔の感謝を捧げ深く哀悼の意を表し、翌々日再出撃準備と報告のため台北の司令部に向向しました私にしみじみと八柱の人物をたたえ、その功を賞讃されたのであります。

残りました私共四名は新機受領後再び、宮古島に前進したのであります。竹田隊長以下八柱の誠第一一四飛行隊に痛撃された米軍が、特攻基地とみて昼夜を分たぬ爆撃を加え、又艦砲射撃を加えまして、愛機のことごとくを爆破され、命によって空しく台湾へ引揚げたのであります。その後、別途任務についておりますうちにやがて終戦となったのであります。ただ水越伍長は石垣島より台湾彰化の本隊に帰り、誠第一一四飛行隊に次いで編成されました攻撃隊に参加、台湾より出撃散華されたのであります。

義烈空挺隊 碑前祭



この祭典は義烈空挺隊が突入した4月24日に最も近い日曜日(本年は4月22日)に、沖縄摩文仁の丘慰霊公園内にある「義烈」碑の前で行はれる。主催するのは全日本空挺同志会沖縄支部である。空挺同志会とは昔の空挺部隊の戦友、自衛隊空挺部隊に在職したり、教育を受けたことのある者及び現職の空挺隊員をもって構成されており、全国に三十余の支部がある。沖縄にはかつての戦友が三人いたが、既に物故して一人もいない。現在沖縄支部の構成員は、習志野にある自衛隊空挺部隊より沖縄の自衛隊に転属になった現職の自衛官であって、その数は二十余名である。この人達が碑を守護し慰霊祭を主催するのである。

今回参加したのは遺族及び戦友とその家族を含めて一四名で、老齢化が進み年々減少してゆく。これに対し現職自衛隊員は習志野、松戸及び沖縄合せて三四名と参列者の主体がこの人達になってゆくことは心強いことである。なお今回は戦死者の同期生等も加わり参加者総数は八九名だった。もう一つこの碑で特色のあるのは、既にこの会報16号で紹介した通り油絵の野外展示施設のあることで、義烈空挺隊を画いた絵五点があり、そのうち二点を常時展示し時々差換えている。

誠32飛行隊の

沖繩到着と突入

第32軍司令部参謀部付だった西野弘二少佐の著書「紅焰」より該当部分を転載する。なお20年3月27日に突入した部隊の者は次の通りで、機種は九九襲である。

中尉	広森達郎	陸士56
少尉	清宗孝己	特操1
少尉	林 一満	幹候9
軍曹	今西 修	乗養14
軍曹	今野勝郎	乗養14
軍曹	島田賢三	乗養14
軍曹	出戸栄吉	乗養14
軍曹	伊藤 孝	少飛15
伍長	大平定雄	乗養14

これ以外の六名は4月3日に突入している。

二十五日内地から二十六日夕方より特攻機進発の電報が入った。特攻機が来てくれる！将兵の士気は上がった。二十五日遊弋している敵艦隊から南部湊川正面に対し熾烈な艦砲射撃をやっているらしい。南の方からグワングワンと犬の遠吠えのような砲声が聞こえる。

神風特攻隊が来るぞ。一九・三〇、中飛行場に到着する予定だ。この特攻隊を指揮する任務を受けている神航空参謀は夕方近く首里を出発して、

自動車で一時間かかる中飛行場に向かった。私も随行する。田舎道をがたつかせながら走るうちに途中で暗くなった。暗くなっても敵の夜間戦闘機のような奴が飛んでくる。時々相当低い高度で道路上も襲うように飛ぶ。敵機の行動の間隙を縫い飛行場に着いた。滑走路近くの茅葺きの戦闘指揮所で飛行場大隊長の野崎大尉以下が出迎えていた。特攻機の到着に備えて誘導準備をしている。参謀は大隊長に言った。

「御苦労様です。到着が少し遅いようですね。しかし今夜は必ず来ます」

大隊長は誘導準備や特攻隊出陣式の準備の完了について説明した。

夜は全く暮れた。星は満天に輝いている。だだっぴろい野原の飛行場の真ん中にあるがらんとした一軒家の指揮所で、十数名の者は我が機の爆音は今か今かと耳を澄ましている。南の方からグワングワンと遠い砲声が時折聞こえるだけで寂しいばかりに静かだ。二つ、三つ黒い人影が茅葺きの家の周りを静かに動いている。時計は二三・〇〇を回っているが到着しない。或いは予定が変更になったのか。途中で機動部隊の敵機にでも捕捉されたのではなからうか。

皆は心配し出した。参謀は一応飛行場から五軒ばかり離れた地区司令部に引き揚げ、今後の戦闘について色々と地区司令官と協議した。もうあきらめた頃だ、と爆音らしいものが聞こえるぞ。

自動車のエンジンの音か？ 爆音だ！ 爆音だ！

来てくれたか！ 中飛行場からの電話だ。特攻機安着、我々は早速飛行場に走った。

飛行場の平坦な滑走路に続いた野原の一軒家、燈火管制のため外界は闇だ。真っ黒な巨影が地表に浮いて見える。戻って見ると特攻隊員達は先着して整列して参謀を待っていた。今この小屋の中で厳肅な神の儀式が行われ始めた。部屋の中の長い机の向こう側に勇士達が並んでいる。数本のローソクの光が紅顔の青年達の顔を煌々と映し出す。十一名の顔は若さに輝いているが、彼等の眼は射るように鋭い。ローソクの焰は時々揺らぐ。人々の影が大きく揺れる。精魂の集い来たった殿堂のためか、神秘に近い空気が部屋を満たした。神の儀式といわずして何と言おうか。参謀の声は低い、部屋の空気に一言一言食い込んで行く。特攻隊に命令は下された。

命 令

「誠攻撃隊は明払曉本島西海及び慶良間列島の敵大型船を求めて必ず撃沈すべし。

赤心隊は司偵一機を出し同攻撃隊の誘導並びに戦果確認に任ずべし」

嗚呼悲愴鉄血の命令は下った。広森特攻隊長は澄みきった声で任務を復唱した。私の気が動転したのか、誰かが、あなた方に続いて私も最後に特攻隊となって出撃する、という声が幻覚の中にこだまして聞こえたように思えた。脳裏にこの幻覚がこびりついた。もし仮に私が命令する立場に立たされた場合、どういうことになったろう。果して命令出来たろうか。

地図を広げて敵艦隊輸送船の配置が説明された。本島東南八十軒に航空母艦を基幹とする機動

部隊数群、湊川南方海上に約二十軒戦艦以下十数隻、慶良間海峡に航空母艦以下数十隻、那覇正面戦艦以下数十隻。特攻隊員は地図を囲んで銘々どれに突っ込んでやろうかと考えを練っている。隊長広森中尉は士官学校卒業の五十六期生、弱冠二十三歳の若武者である。隊長は隊員に明日の突入部署を命じた。

「離陸は〇六・〇〇、第一編隊は本島西海岸を低空で南下し、慶良間の敵艦を。第二、第三編隊は隊長直率し本島西海の敵に突入」

と。その後隊長は隊員に突入時の注意を平素教育しているであろうが、最後の任務を立派に果たすため細心に行った。隊長は皇国の不滅を信じ、我々の任務達成により戦勢挽回の糸口となれば幸甚であると結んだ。

私は今この広森中尉を初めとする特攻隊員に会った。いや挿んだのだ。このような人達が今までの戦局を支えてきたのだ。やがて恩賜の御酒が居並ぶ勇士の盃に盛りられた。

美化することが能ではない。人間としての心の流れを見えなくすることがあってはならない。これらすべての若人に達観があったのだろうか。明日の朝、いや六時間後には帰り来ぬ永遠の旅路に出掛ける若人達、盃をおし頂いた後、屈託のない爆笑が湧いて来た。今日は敵の戦闘機の警戒線をつっぱして来たのだと、隊長がその有り様を語り続けるうちに、急にだけた雰囲気部屋に溢れた。

紅い林檎顔は綻び、皆椅子に腰を下ろして御馳走を食べ始める。御馳走と言っても野戦料理だが

皆若い。お酒よりも菓子の方がよさそうだ。お菓子をほおばりもごもごやっている。参謀は部屋から出て暗い木陰に寄った。三日月が出ている。無数の星が天空に輝いている。じっと空を見つめている眼から涙が流れ出ている。尊い運命を背負わされた若者達、命令を下した者も、うつつのものは思われなかったに違いない。

明朝〇六・〇〇に特攻隊が出撃する。我々は深夜の道を軍司令部に向かって急いだ。

二十七日の朝はほのぼのと明け始めた。首里城址の藪かげに身を隠して水平線の彼方を見張った。朝風にちぎれ雲が中空にかかって動こうとしない。明け空は薄い紅化粧だ。油鏡のような海の面も漸く朝の眠りから醒めたようだ。東には中城湾、南には島尻半島がぐうっと足を伸ばしている。島尻の向こう水平線には慶良間列島が横に長くのしかかっている。その間には敵の戦艦二十数隻、朝霧の中に散見する。

西南足下の低地は去年十月十日の空襲で灰燼に帰した人影のない焼野原の那覇の街跡、西は東支那海。悠々と一列縦陣で巨艦が波をけて北行している。更に右に目を転ずれば北、中飛行場が森の中に赤肌の地面を晒している。朦朧とした朝の包みは未だとざされたままだ。我々は〇六・〇〇を息をこらして待つ。軍事司令官等も山頂に居られる。敵機は未だ一機も飛んでいない。

数分後の彼等の鉄槌を敵艦は御存じない。大地を揺り動かすような爆音が北から湧いて来た。怒

りの爆音は、おお、西海岸沿いを超低空で三機編隊、矢のように飛んで行く。くっきり見える日の丸の印、もう一組が海上に小さく電光のように天翔けている。旭光に照らされキラキラ反射する。天翔ける神々だ。頭が下がる。莊嚴の極み。武人的表現をすれば衆人環視の内に栄えある駒を進めるといふことだ。突然グングンバリバリ、グングンバリバリ、大海は早太鼓を打つように猛然とうなり出した。その音は遠く深く海の彼方にこだまして、一敵艦隊の対空砲火だ。嗚呼我が神風特攻隊に幸いあれ！

やった！ 慶良間の沖に火柱がぱっと上がった。グワイン！ 爆裂音が余韻を引いて海からやってくる。また上がった。火柱、黒煙、濛々茸のような黒い煙柱が水平線上に立ち登った。次々に十一本の火柱、何本かは瞬時に消え今まで見ていた艦影もなくなった。撃沈だ。撃沈だ。敵は余りにも脆く沈没してしまった。

戦は瞬時に終わった。今戦のあった鏡のような海の面には未だ炎々と六つの火柱が立ち、黒煙は高く高く天にうなぎ登りに登っている。敵にとつては突然の余りにも無残な出来事だった。敵は早朝から奇襲の強打を受け驚愕したに相違ない。海上に火をふいて沈みかけている軍艦の外には一艦も見えなくなった。蜘蛛の子を散らすように我が視野の外に逃げ去った。広森達郎中尉ら九名、九機の特攻機は五百挺の爆弾を抱きガソリンを満載して敵艦に体当たりをして数隻の敵艦を撃沈し、或いは大破せしめた。英魂よ、これからの我等の戦いを照覧下さい。